

言語・方言の「消滅危機」を救う ～多様な琉球方言の継承～

琉球大学 教授 狩俣繁久

言語の機能と危機

言語は、人が知覚し認識した現実世界のできごと、微妙で複雑な感情、精密で膨大な量の知識と思想を表現し、伝達する重要な機能をもつ。また、言語は、人が創造したもののなかで最も緻密で繊細で複雑な道具である。言語の機能と価値は、英語や中国語のような大言語も、話し手が数人の弱小言語や方言も同じである。

人はさまざまな自然環境に適応しながら、絶え間ない創造と改良を積み重ねた結果、価値観などを含めた有形、無形の文化を生み出してきた。今の私たちの暮らしは、幾世代も前から続く先人の生活の積み重ねの上になりたっている。こうした地域文化は、その地の暮らしに根づいたことば—方言によって時間を越えて伝えられてきた。方言は地域文化の伝達と継承にとって最も重要な役割を果たしているのだ。

明治維新によって中央集権的な国家が誕生し、近代化と西洋化が推し進められると、日本的なもの、地域的なものは劣ったものとみなされて軽んじられた。豊かな自然に適応するなかで発達した地域文化と方言は軽視されるようになる。近年は、地域文化や方言も見直さるようになったが、祖先から受けつがれた地方文化と方言の衰退は深刻な事態に陥っている。

2009年2月、ユネスコは世界の約7千の言語のうち、2500言語が消滅の危機に瀕しているという調査結果を発表した。ユネスコは、日本国内では8言語・方言が消滅の危機にあるとし、なかでも日本国内の琉球諸島・奄美



奥集落での調査実習

群島で伝統的に話されてきた鹿児島県の「奄美語」、沖縄県の「^{くにかみ}国頭語」「沖縄語」「宮古語」「八重山語」「与那国語」が消滅の危機に瀕していると認めた。

話しことばとしての方言は、発した瞬間に消えるはかないものだ。方言は、話者の他界とともに失われていく。方言によって表現された世界を記録しておかなければ、地域の生活と労働、精神世界を知る手がかりが失われてしまう。地域社会の歴史、文化を存続させていくには、方言世界をまるごと記述し、後世に継承していくことが必要である。記録をもたない地域社会は、記憶を失った人間と同じになってしまう。

方言辞典の編纂

方言を後世に残す手段として方言辞典がある。農村には農村を、山村には山村を、漁村には漁村を特徴づけつつ、独特の語感をともなって使用される方言がある。地域ごとにそのことばをまとめて方言辞典を編纂し、記録できれば、そこで暮らし、子どもたちを育ててきた親たちの労働と生活を、先人の知識と経験とともに後世に伝えることが可能になる。そのようななか、沖縄島名護市幸喜集落の方言辞典を刊行するための仕事を、2000年4月

から共同研究者の仲間恵子さんを行っている。幸喜で生まれ育った宮城萬勇さん（1935-1983）の書き残した方言ノートが幸喜区公民館に残されていたことがきっかけであった。2014年7月14日時点で調査は524回を数え、現在も進行中である。

幸喜集落の海岸近くにハーミマタ（亀又）と名づけられた小さな谷がある。その方言地名は、近くの砂浜にハーミ（海亀）が産卵のためにやってきたことに由来する。同じく、ウキヌヤマと名づけられた方言地名がある。ウキヌ（鬱金^{うこん}）は、琉球国時代に薬用、染料として高値で取り引きされた。ウキヌヤマはそこで鬱金^{うこん}を栽培したことに由来する。方言地名からは地域の歴史やかつての自然環境などを知ることができる。

方言辞典の編纂においては、例えば植物の記述は、和名だけの記述にせず、その利用方法なども追加した。形容詞は、人や物の特徴や状態を表す単語で、その意味のなかに人々の感覚や感情が刻印されている。感じ方や表現のしかたに出てくる地域ごとの微妙な使い分けを後世に伝えるのも、方言辞典の大きな役割だ。

2013年5月からは沖縄島北端の国頭村奥集落の方言辞典作成のための調査も始めた。奥方言辞典作成は、琉球大学の講義として学生たちと共同作業で行っている。学生たちは教室では学べない多くのことをお年寄りたちに教えてもらうと同時に、地域の人々からの期待と使命の大きさを体感している。

琉球諸島・奄美群島は人口も面積も日本全体の約1%にすぎないが、その北端の喜界島から最西端の与那国島までは約900kmあり、宮城県から島根県までの距離にあたる（図参照）。この広い海域に47の有人の島々が点在しているために、方言差はひじょうに大きく、琉球諸島の北のはしと南のはしでことばが通じな

図 南西諸島を本州に重ねる

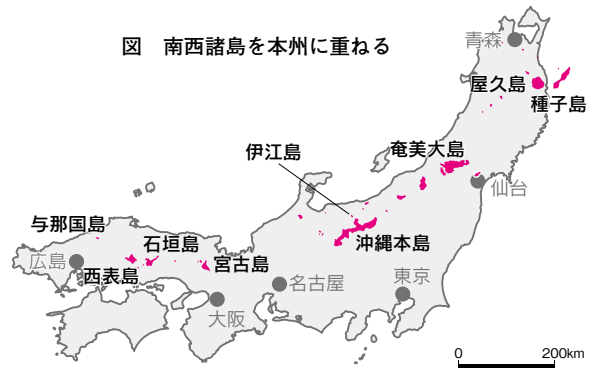


表 琉球諸島の言語の多様性の例

地域	国頭語／伊江島	沖縄語／那覇	宮古語／平良
ことば			
兄	ンーミ	アフィー	アザ
足	ティシャ	ヒサ	バギズ
大きい	ウビシャ	マギサン	ウブーウブ

いだけでなく、与那国島と石垣島、宮古島と沖縄本島、奄美大島と沖縄本島のあいだでも通じない（表参照）。すべての島の方言辞典をつくることが目標だ。

2006年、沖縄県議会は条例第35号で「しまくとぅばの日」を制定し、「しまくとぅば（故郷の方言）」の普及継承に取り組んできた。最近では小中学校での方言教育のための読本を編集したり、方言普及活動に取り組む沖縄各地のNPO法人が方言教室をひらいたり、さまざまな取り組みがなされている。

方言母語話者が減少し、通常的环境での方言の習得が困難になっている現状で最も必要なものは、この方言辞典である。批判を恐れずにいうなら、精密な辞書と多量の音声資料を残すことのできた方言は、百年後も使われ続けるだろう。辞書を残さなかった方言は、その地域の方言がどのような特徴をもち、どのような世界を表現していたか、忘れ去られてしまう可能性すらある。当地の暮らしを守り、未来の子どもたちに受けついでいくために、消滅の危機に瀕した方言をいかにして救っていくのか、その試みは始まったばかりである。